

氏名	原野 雄矢
学位の種類	修士（鍼灸学）
学位記番号	鍼修第478号
学位授与の日付	令和6年3月12日
学位授与の要件	大学院規則第30条および学位規程第4条該当
学位論文題目	脊髄反応性と痛み感覚の関連性
指導教員	伊藤 和憲

学位論文の要旨

【目的】

脊髄反応性は痛み感覚に影響を与える可能性が示唆されている。しかし、脊髄反応性を測定する方法である Temporal Summation of Pain(TSP)を測定するには、装置が必要であり臨床応用することは難しい。そこで、電気を漸増的に増加させることで感じる感覚閾値、痛覚閾値、耐性閾値が脊髄反応性を示す TSP にどのような関係があるのかを健常者を対象に検討した。

【方法】

研究1では、同意の得られた健常者35名を対象とし、心理評価を行ったのちに、知覚・痛覚定量分析装置(Pain Vision)を用いて、感覚閾値、痛覚閾値、耐性閾値を測定し、その後 TSP を測定した。また、研究2では、同意の得られた8名を対象とし、心理評価を行ったのちに、絶縁鍼を皮下（約2mm）に刺入し、深部痛覚計を用いて、痛覚閾値、耐性閾値を測定し、その後 TSP を測定した。

【結果】

Pain Vision で測定した痛覚閾値と TSP の間に有意な相関関係は認められなかったものの($r=-0.22$, $p=0.30$)、深部痛覚計を用いて皮下で測定した痛覚閾値と TSP の間に有意な正の相関関係が認められた($r=0.82$, $p=0.02$)。

【考察】

本研究では、Pain Vision で測定された痛覚閾値と TSP の間に関連性は認められなかったものの、深部痛覚計で測定された痛覚閾値にのみ関連性が認められた。その理由として、Pain Vision では皮膚表面にて痛覚閾値を測定し、深部痛覚計は皮下にて痛覚閾値を測定したが、皮膚表面より皮下にはポリモーダル受容器が多く分布するとされていることから、皮下で測定した痛覚閾値の方が TSP の状態をより反映しているものと考えられた。